

火	1	大安
水	2	赤口
木	3	先勝
金	4	友引
土	5	先負
日	6	仏滅 定休日
月	7	大安
火	8	赤口・寒露
水	9	先勝
木	10	友引
金	11	先負
土	12	仏滅
日	13	大安 定休日
月	14	赤口・体育の日 定休日
火	15	先勝
水	16	友引
木	17	先負
金	18	仏滅
土	19	大安
日	20	赤口 定休日
月	21	先勝
火	22	友引・即位礼正殿の日 定休日
水	23	先負
木	24	仏滅・霜降 総集市内見会
金	25	大安 時雨茶会・総集市
土	26	赤口 時雨茶会・総集市
日	27	先勝 時雨茶会・総集市
月	28	仏滅
火	29	大安
水	30	赤口
木	31	先勝

トオル社長の珍道中 「小川長樂さん・象彦さん」に行ってきました!

「第2回華乃会バスツアー」の下見で京都山科の小川長樂さんと京漆器の寺町本店「象彦」さんに行ってきました。少し歴代長樂さんの年譜についてのお話から。初代長樂小川大治郎氏は12歳で11代慶入の弟子となり作陶を始められます。明治39年に12代弘入のもとで、その技量すこぶる熟達なるをもって特に独立を許され、五条坂に陶房を設け、楽焼一筋に研鑽精進されました。この頃、建仁寺の茶祖栄西禪師を私淑し、更に管長竹田黙雷老師に参拝して茶禅一味の境に達して「長樂」の号を頂き。又今日庵円能齋宗匠より「長友軒」軒号が与えられました。初代の偉業を継がれた2代はさらに陶技の研鑽に精進され「自分だけの作品」の創作に没頭し、建仁寺管長額川老師より「景雲」の雅号を授与され、現在の3代長樂氏は平成4年襲名。醍醐寺座主、麻生文雄門跡より「松風軒」の軒号が与えられ、長男小川裕嗣と共に楽焼の可能性を求め、長樂窯の伝統を守りつつ、挑戦しておられます。



写真中央に小川長樂氏、左が長男裕嗣氏



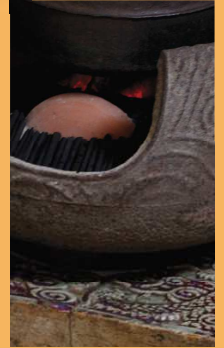
1954年 株式会社象彦設立
現在10代西村毅氏が代表取締役社長に就任

寛文元年(1661年)、象彦の前身である象牙屋が開舗、漆器道具商としての道を歩み始めます。朝廷より時絵司の称号を拝受した名匠・3代目西村彦兵衛が晩年「白象と普賢菩薩」を描いた時絵額が洛中で評判となり、人々はこの額を象牙屋の「象」と彦兵衛の「彦」の二文字をとり、「象彦の額」と呼びました。それ以来の通り名が時を経て、また、信頼を深めて今日に至っています。4代目彦兵衛は仙洞御所の御用商人をつとめ、6代目は風流の道に通じ数々のお好み道具を制作。8代目は漆器の輸出を行漆器貿易の先駆者と呼ばれ、京都時絵美術学校なども設立されました。現在は、時絵の高級品だけでなく、日常使いの食器やインテリアなど幅広く展開、新たな可能性を広げべく 海外企業やクリエイターとのコラボレーションも積極的にを行い、京漆器の語りつくせぬ魅力を世界に広げていく歩みを続けています。

The お道具拝見② 「蔦の細道」について

蔦の細道は文字通り蔦がおいしげって幅が細くなっている道。茶道具の意匠にも好まれている。また「伊勢物語第九段」に「行ききて、駿河の国にいたりぬ。宇津の山にいたりて、わが入らむとする道はいと暗う細きに、つたかえでは茂り、物心ぼそく、すずなるめを見ることと思ふに、修行者あひたり。駿河なる宇津の山へのうつつにも夢にも人にあはぬなりけり」とあるところから、東海道五十三次の丸子(まりこ)と岡部との境の、宇津の山越えの道(宇津谷峠)をさすことが多い。写真①は深江芦舟筆「蔦の細道図屏風」。ときは五月、駿河の宇津山で業平は顔見知りの修行者に出会い、都の恋人への手紙を託す。半円状の山を重ね、山奥の場景を意匠美ゆたかに描写している。芦舟は、江戸中期の画家。京都生銀座役人深江庄左衛門の子。名は庄六、別号に青白堂等。父が尾形光琳のパトロン中村内蔵助の同僚で、光琳に直接学び、宗達派の作品を学んだ。

佐久間勝山 蔦の細道茶碗 駒雲斎箱



写真① 深江芦舟筆 蔦の細道図屏風6曲1隻 重要文化財・18世紀 東京国立博物館蔵

The お道具拝見① 「雲錦の意匠」について



秋に開花する豊田市小原地区の四季桜。紅葉の時期と重なって、まさに時絵や色絵に描かれた雲錦模様を思わせる

雲錦の意匠は、平安時代の「古今和歌集」紀貫之等の歌に由来すると伝わっている。「桜花 さきにけらしな あしひきの 山のかひより 見ゆる白雲」 紀貫之 「竜田川 もみぢ乱れて 流るめり 渡らば錦 中や絶えなむ」 読人知らず 移りゆく季節を「あはれ」と見たてた王朝文学の美意識。茶の湯では春の桜を雲、秋の紅葉を錦に見立て「雲錦」という。写真の「色絵雲錦鉢」は、幕末の陶工仁阿弥道八(2代高橋道八)が、吉野山の桜は雲かとぞ見え、竜田川の紅葉は錦の如しの意から考案した。仁阿弥道八の作品共箱には「乾山摸」とあるものが多い。しかしそれは道八が、乾山の作風を模写するの意味ではなく、「新意」つまり新意を写すとか模写の意味で、道八は乾山の心を学びながら、新しい様子を形成・確立した。現在乾山の作品には雲錦の意匠の類例は確認されていない。仁和寺宮より「仁」、醍醐寺三宝院宮より「阿弥」の号を賜る。



仁阿弥道八 色絵雲錦鉢 京都国立博物館蔵

令和元年 華乃会お客様ファーストのサービス価格でご紹介です

<p>須田青華 玄猪包香合 ¥80,000</p>	<p>水出宋絢 ¥16,000 粉引鳥茶碗</p>	<p>須山昇華 ¥23,000 紅酔紅葉茶碗</p>
---------------------------	---------------------------	----------------------------

本歌は野々村仁清。古く旧暦の10月、上の亥の日に、宮中では亥の子の祝いといい、亥の刻に亥の子餅(玄猪餅)をついて食べたが、女官たちにも下賜されて配られ、それを包んだ量紙(たとう)を玄猪包ともいった。この香合はその形を写したもので、白釉を一面にかけ、色水引を四方から十字に結び合わせた間に、銀杏の葉一枚を青赤釉で挿し挟んで、雅な上つ方の包み物の姿をよく表している。

お知らせ

10/ 25 木 時雨茶会

26 金 茶道具総集市

27 土 2階 松華軒

・編集の窓・



高山寺、開山堂の紅葉

photo by S.A

梅ノ尾 高山寺
京都市街の山中に位置する高山寺は山号を梅尾山と称し開基は、鎌倉時代の明恵。名前は、明恵上人が寺を再興した時、後鳥羽上皇から賜った「日出先照高山之寺」という号を基につけられたこと。高尾山のある梅尾は、横尾・西明寺、高雄・神護寺と共に三尾(さんび)と呼ばれる紅葉の名所として知られている。この地で栽培された茶は榮西が南宋より帰国後に贈られたものと伝えられ、明恵はこれを「異制庭訓往来」では梅尾の茶園とされ「本茶」とし他のお茶と区別した。現在、境内が国史跡に指定されており、石水院、開山堂、金堂や石水院の中に展示されている「鳥獸人物戯画」他、絵画、典籍、文書など、多くの文化財を伝える寺院として知られる。

古代ケルト民族では、11月1日が新年とされ、大晦日にあたる10月31日の夜に先祖の霊が家族に会いに戻ってくると信じられていました。(日本で言うお盆みたいなものです)しかし、悪霊も一緒にやって来て、作物に悪い影響を与えたり、子どもをさらったり、現世の人間たちに悪いことをするといわれていました。そこで人々は仮装して悪霊を驚かせて追い払うことを思いつき現在の形になったと言われております。

ギャラリー森田ホームページ
右記のQRコードを読み込み
アクセスしてください!

